様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　31　日現在

機関番号：33111
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21520604
研究課題名（和文）　福祉のためのタスク中心教授が第２言語習得過程に及ぼす影響
—縦断的事例研究—
研究課題名（英文）　Effects of Welfare-related Task-based Language Teaching on Second Language Development: Longitudinal Case Studies
研究代表者
戸出　朋子（TODE TOMOKO）
新潟医療福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：00410259

研究成果の概要（和文）：タスク中心の外国語指導とは，学習者が目標言語を使って「する」必要になること，つまりタスクを中心にシラバスを組んで行う外国語の指導を指す。外国語として英語を学ぶ福祉専攻の大学生を対象に，外国人介護福祉士候補者に介護福祉の専門性について英語で説明するというタスクを開発し，学生の言語発達を追う縦断的事例研究を行った。指導の初期は低く安定した状態を呈していたが，指導が進むにつれて変動が激しくなり，タスク中心教授によって変化が学習者の内部で起ころうとしているということが示された。

研究成果の概要（英文）：This study longitudinally examined second language development of undergraduates taking a task-based course of English as a foreign language. The course centered around tasks requiring the welfare majors to engage in explaining care work professionalism to foreign care work trainees. The developmental trajectories of the learners exhibited variable phases after initial low stable stages. The intra-individual variability suggests changes were taking place with task experience.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：教室内第 2 言語習得，タスク中心の英語教育，用法基盤の第 2 言語習得

１．研究開始当初の背景

(1) タスク研究は第 2 言語習得研究分野で盛んに行われている。しかし，そのほとんどはタスクの変数が言語運用に与える影響を横断的に調査する実験研究がほとんどで，タスクを継続するにつれて起こる学習者の言語発達を縦断的に調査する研究はほとんど行われておらず，縦断的研究の必要性が叫ばれていた。また，採用されていた研究アプローチも，心理言語的アプローチがほとんどであり，タスク研究者たちの間では，社会文化的アプローチなど，もっと広い視野でタスク研究を行うことの必要性も指摘されていた。

(2) ダイナミック・システムズ理論の枠組みでの第 2 言語習得研究が注目されていた。このアプローチでは，言語を複雑系とみなし，発達は原因・効果の単純な線形的な関係で説

明できるものではなく，予測不可能な非線形的な発達軌跡をたどると考える。したがって，このアプローチを採っている第 2 言語習得研究者達（Larsen-Freeman & Cameron, 2008; Verspoor, de Bot, & Lowie, 2011）は，原因とその結果を直線的に捉えて仮説を検証する従来型の研究方法に代わる方法を提唱し，そのひとつとして縦断的事例研究を挙げていた。これが縦断的事例研究を動機づけた。

(3) ダイナミック・システムズアプローチでは，第 2 言語は具体事例を基盤に抽象化が進むという入力駆動で体験基盤の言語習得観を採る。タスク中心教授は，まさにこの用法基盤の言語習得を促進するものと言われており(Robinson & Ellis, 2008)，このことを本研究で明らかにしようと考えた。

(4) 我が国の大学英語教育では大学生の英語学力低下が問題としてあげられている。大学生が伝達したい意味は認知的に複雑な内容であるがレメディアルレベルの学習者の場合，リソースとして持つ英語の言語形式の複雑さと伝えたい意味内容の認知的複雑さの間に溝がある。この溝を埋めるためのタスクの開発の必要性があった。

２．研究の目的

認知的に複雑な処理が要求されるタスクをデザインしてタスク中心教授を大学の英語授業で実施し，英語初級レベルの学習者の第 2 言語発達をダイナミック・システムズアプローチで縦断的に分析することを目的とした。以下は，設定した研究課題である。

(1) タスク遂行時に，学習者は言語形式への注意を向けることができるだろうか（意味に焦点を当てた活動の中で一時的にその意味をあらわす形式に注意を向けることが，第 2 言語習得を促進すると言われている)。

(2) 伝えたい意味の複雑さと言語形式の複雑さの間の溝はどのように埋まっていくだろうか。

(3) 言語形式の複雑さの発達は，ダイナミック・システムズ理論が主張するように，安定期と変動期から成る不連続なパタンを呈するだろうか。

(4) タスク中心教授において経験した具体事例を基盤にして言語知識は発達するのだろうか。

３．研究の方法

福祉を専攻する大学生の英語教育のためのタスク中心教授をデザインして実施した。研究は，(1) タスク遂行中の学習者の注意が形式に向けられるかどうかを調べることを目的とした研究（上記の研究課題 1)，(2) 学習者の発達の軌跡を 1 セメスタの期間を通してダイナミック・システムズ理論のアプローチで縦断的に追う研究（研究課題 2, 3, 4)，(3) 一人の学習者が教師からの足場を受けながらどのように自己制御の度合いを高めていくのかを縦断的に探る研究（研究課題 4 に関連）という 3 つの研究で成り立っていた。以下，(1)，(2)，(3)の研究方法を順に述べる。

(1) データは，医療福祉系大学の平成 21 年度 1 年生英語 II のクラスから収集された。テーマを介護福祉に絞り，「外国人介護福祉士候補者に，介護福祉の専門性について説明し理解してもらう」ことをゴールとするタスクを連携研究者（介護福祉を専門とする）と共に 7 ユニット分開発した。そのうち，「介護と看護の違いを説明する」(5 単位時間)「公的サービスによる介護の必要性を説明する」（4 単位時間)「専門職と素人の違いを説明する」(5 単位時間）という 3 ユニットを実施した。各ユニットは，読解を中心とする導入タスクで概念形成を行った後，口頭産出タスクをグループで行い，その後，グループ協同での筆記産出タスクを行うという構成だった。データ収集は，ユニット 3 の口頭産出タスクと協同筆記タスクから収集した。各グループの話し合いの様子を IC レコーダーで録音し，そこから得た言語データからフォーカス・オン・フォームエピソード（以下，FFE）を同定した。グループ内での話し合いの中で，一つの言語形式への注意が始まった時点とその注意が終了した時点の間を一つの FFE とした。そのうち，教師でなく学習者が発動した FFE を学習者主導の FFE とした。学習者主導の FFE を未分析志向の FFE と分析志向の FFE に分類した。具体事例の検索のレベルを超えないものを未分析志向とし，それを超えて分析や他の項目との比較が起こっているものを分析志向と定義した。そして，口頭産出タスクと筆記産出タスクのそれぞれにおける学習者主導の FFE の頻度，さらに分析志向の FFE の頻度を出した。

(2) 研究(2) では，1 セメスタの間，タスクを継続的に取り組んだ学習者の言語発達の軌跡を追った。医療福祉系大学の平成 22 年度 1 年生英語 II のクラスで（1）と同様のタスク中心教授を実施した。加えて，各授業時間の最後 15 分を使って，学生は 15 回の授業とも同一タイトルで英語で作文を書いた。作文は個人の作業であった。この作文では，タスクで行った内容を振り返って，各自がめざす医療福祉専門職のあるべき姿や抱負を書くことが求められた。辞書や授業で配布され

た資料などは参照できなかった。学生のうち，データ収集に同意する者 4 名（仮名，友香，美香，佳代，愛子）の 15 回分の作文を分析した。上記 2 で述べた研究課題(2)と(3)に関して分析するために，各エッセイの形式の複雑さと伝えたい意味の複雑さを「1t ユニット内の s ノードの数の平均」という指標に基づいて算出した。その算出結果を，参加者ごとに時系列にグラフ化した。そして，Verspoor, de Bot, & Lowie(2011) が提唱する手法で得点の変化をグラフ化し，モンテカルロ・シミュレーションにより，発達の有意味なジャンプが見られるかどうかを検定した。さらに，研究課題(4)に関して分析するために，各回の作文の中で，タスクで経験した事例から由来している表現を同定する必要があった。参加者が受けたタスク中心教授の教材から由来している表現（具体的には，教材に含まれる語彙項目が最低一つでも含まれるフレーム）を同定して頻度を求め，各作文に占めるその率を算出した。それを時系列に並べて，その変化と上で求めた形式の複雑さの変化の間の相関係数を求めた。

(3) 研究(3)では，主語・述語構造の習得に絞って，タスク中心教授を受ける一人の学習者が教師からの足場を受けながらどのように自己制御の度合いを高めていくのかを縦断的に研究した。参加者（仮名，武）は，福祉を専攻する大学一年生で，習熟度は初級レベルだった。研究代表者が担当する教養課程の英語クラスに所属し，研究（1）（2）で実施したのと同じタスク中心教授を受けていた。研究（2）と同様に，各授業の最後 15 分間に同じタイトルで英語作文を書いた。武は，自由意思によりデータ収集に同意し，その作文を素材に，研究代表者の研究室で面談を日本語で行った。まず，武は，作文をどういう意味で書いたのか，そしてどのような思考プロセスを用いて文を組み立てたのかを日本語で告げた。その後，研究代表者（教師）の援助を受けながら，主語・述語動詞の誤りを自己訂正していった。分析単位は節とし，Lantolf and Alfaarfeh（1995）を参考に，教師が与えた足場の明示性の度合いをスケール化した。具体的には，「最初から正しいので訂正する必要なし，0 点」「指摘されなくても訂正できた，1 点」「誤っている個所を指摘されれば，それ以上の足場がなくても訂正できた，2 点」「意味上か形式上のどちらかの足場を得て訂正できた，3 点」「意味上及び形式上の足場の両方を得て訂正できた，4 点」というスケールで，これは，点数が高いほど依存度が高い，つまり自己制御できていないということを表している。この得点を，時間軸上に並べて依存度の変化を見た。

４．研究成果

（1） 研究課題(1)(研究１)の結果をまとめる。口頭産出タスクでは，学習者が主導で形式に注意を向けることはほとんどなかったが，その後の筆記産出タスクでは頻繁に形式への注意が向けられていた。さらに，分析志向の FFE も筆記産出タスクで頻繁に確認され，筆記産出タスクでは，学習者は単なる語彙項目の検索にとどまらず，文法に注意を向けながらより正確性の高い表出を行おうとしていたことが明らかになった。この結果は，習熟度の高くない学習者が認知的に複雑な内容のタスクに取り組み，自発的に形式の問題に分析的に注意を向けたことを報告した点で意義深い。

（2） 研究課題(2)（研究 2）の結果をまとめる。図 1 ～ 4 は，友香，佳代，美香，愛子それぞれの伝えたい意味の複雑さの変化と形式の複雑さの変化を 1 つのグラフに表示したものである。

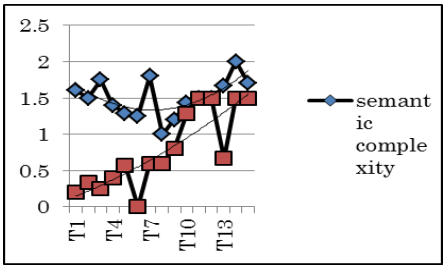

図 1 友香の意味の複雑さと形式の複雑さの変化

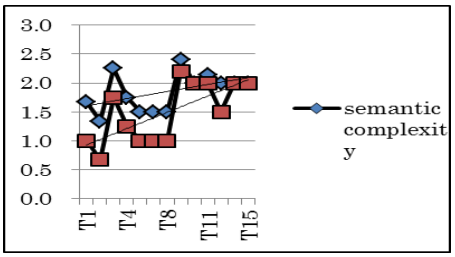

図 2 佳代の意味の複雑さと形式の複雑さの変化

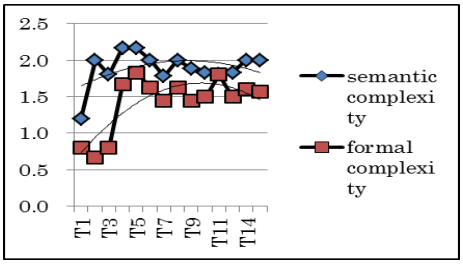

図 3 美香の意味の複雑さと形式の複雑さの変化

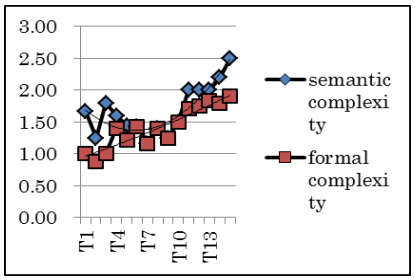

図 4 愛子の意味の複雑さと形式の複雑さの変化

ひとりだけ他の 3 人とは異なったふるまいを見せた愛子の場合を除き，伝えたい意味と形式の間の複雑さの間の溝は，形式の複雑さが向上した時に縮まっていったということがわかる。愛子の発達は，他の 3 人に比べて始終変動が僅かだったが，興味深いパタンを示していた。中間期に溝が埋まり，言い換えると正確な産出ができるようになったが，その後伝えたい意味の複雑さが増し，再び溝が広がっていった。彼女については，後で分析を加えたので後述する。

（3） 研究課題(3)（研究 2）の結果をまとめる。研究課題（3）は，各参加者の言語形式の複雑さの発達は，安定期と変動期から成る不連続的なパタンを呈するか，であった。ひとりだけ他の 3 人とは異なったふるまいを見せた愛子の場合を除き，答は，条件付きで不連続のパタンを呈すると言える。友香，佳代，美香の 3 人の発達の軌跡には，変異の少ない安定期と大きい変動期が見られた。3 人とも，低く安定した段階から始まっており，その後変動期に入り，形式の複雑さがこの時向上した。しかし，美香を除いて，次の安定期に達したと言えるほどの発達上の有意味なジャンプは立証できなかった。佳代の軌跡はそれでも後半に高く安定しつつある様相を呈したが，友香は変動の激しい時期から抜け出て次の段階に入ったと結論付けることはできなかった。この変動の激しい時期は，前段階の文法と次段階の文法が共存している時期と解釈できる。

（4）上記の研究 2 で，ひとりだけ個人内変異が僅かで，複雑さの顕著な変化を呈しなかった愛子の実際の言語運用を見てみると，後半期の運用が前半期のそれに比べて語彙選択の自然さという点で格段に向上しているように思われた。研究 2 で採用した統語面での基準ではとらえきれていない変化が起こっている可能性が捨てきれなかったので，このことを実証すべく，統語発達に語彙選択の自然さということを加味した基準で愛子のデータを再分析した。図 5 は，愛子の統語発達の得点（研究 2 で算出した得点，図 4）の変化と語彙選択の自然さを加味した統語発達の得点の変化を一つのグラフにまとめて視覚化したものである。前者が変動が少ないのに対し，後者は 9 回以降急激に上昇していることがわかる。このジャンプは統計的に優位な傾向があるということが確認された。このことは，統語・語彙選択において安定的に目標言語の規範に近い状態に達したと断言することはできないが，ほぼその状態になりつつあるということを暗示している。

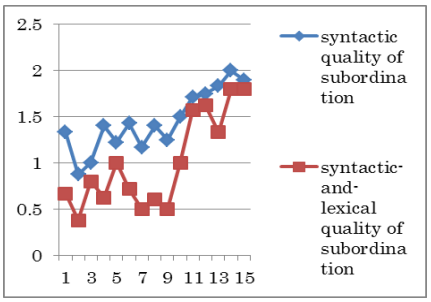

図 5 愛子の統語発達の軌跡と統語・語彙選択発達の軌跡

（5）研究課題（4）についての結果をまとめる。研究課題（4）に答えるために，友香と愛子のデータで，それぞれタスク中心教授において経験した具体事例の活用度と言語発達の相関関係を調べた。図 6 は，友香の形式の複雑さの変化とタスク事例活用度の変化をグラフ化したものである。このグラフからの形状は非常によく似ており，サポーティブな関係で発達していると思わせる。このことは統計的にも高い相関が確認された。このことは以下のことを示している。友香の初期の英語知識は低く安定した状態であった。タスク経験を積むにつれて，彼女はタスク事例を自分の表出に取り入れるようになり，それと共に複雑さも急速に伸びた。しかし，それは極めて不安定なもので，タスク事例で対応できない意味を表そうとする時やタスク事例を活用しても正確に活用できないときは複雑さも後退した。これは，アイテム的な言語発達を示唆している。

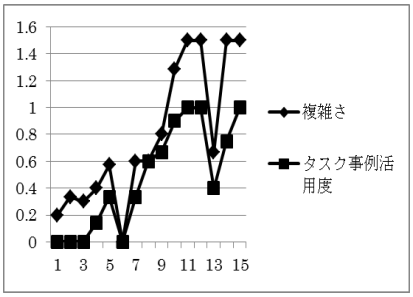

図 6 形式の複雑さとタスク事例活用度の変化（友香）

愛子については，語彙選択の自然さを考慮しない統語発達の軌跡とタスク活用度の変化の関係，語彙選択の自然さを加味した統語発達の軌跡とタスク活用度の変化の関係の両方をそれぞれ調べた。前者の関係に関しては，有意な相関関係は見られなかったが，後者に関して有意な相関関係が確認できた。このことから，1）愛子は，統語のみの観点からでは，初期の段階で，ある程度発達していたが，語彙選択という意味では目標言語の規範からかけ離れていたこと，2）タスク事例を活用するにつれて，語彙選択において目標言語の規範に近づいて行ったということが言える。この愛子のデータ分析の結果は，メタ言語知識志向の成人第２言語学習者が，タスクを中心とした学習によって，メタ言語知識を使った不自然な表出からコロケーション的により自然な表出へと変容していく可能性を示唆している。以上の友香と愛子の結果に共通して言えることは，この２名には，語彙選択の自然さを加味するしないの違いはあれ，タスクで経験した具体事例を活用したアイテム的な発達が見られたということである。そこからそれを超えた抽象的知識へと発達していくのかどうかについては，本研究からは不明である。

(6) 研究３の結果（研究課題４に関連）についてまとめる。研究(3)では，主語・述語構造の習得に絞って，タスク中心教授を受ける一人の学習者が教師からの足場を受けながらどのように自己制御の度合いを高めていくのかという課題であった。タスクで学習者が触れた動詞（タスク事例の中の動詞）を活用して節をつくる場合とそうでない動詞を使って新しく節を一から組み立てる場合では結果に違いが見られた。前者の場合は，時折後退現象は見られはしたものの，自己統制度が高まり，中盤以降には完全に自己制御できるようになっていた。それに対し，後者の場合は，自己制御がなかなか進まなかった。その学習者は言いたいことを日本語で考え，その語順で英語の語句を置いていくストラテジーをとっており，英語の主語・述語動詞の構造を独力で表出することができなかった。なじみのある表現を使えるように，教師が日本語で誘導して（つまり，意味上の足場を与えて）初めて，主語・述語構造を正確にとらえて表出することができた。このことは，学習者が過去に経験したことのある動詞を含む節の場合は教師からの少しの助けで自己制御できるようになるが，全く新しい節の場合は，言語化以前の意味をどう捉えるかというところが制御できないということを示している。

(7) 本研究は事例研究なので一般化はできないが，タスクに基づく学習はアイテム的で，タスクで経験した事例に依拠した発達が見られた。そして，1セメスタの指導期間では，アイテムレベルを超えた抽象的なスキーマ形成までには至らない学習者がいることも示された。スキーマ形成にはタイプ頻度に富む言語経験が必要(Tode, 2008)であると言われているが，外国語学習環境という限られた資源の中で，どのようにスキーマ化を促せばいいのか。手がかりは，タスク事例にあると思われる。研究３（上記６）で，タスク事例の記憶とそれを活用した表出を軸に教師からの対話的援助を得ながら自立度が高まっていくデータを得た。この時の学習者は，単なる丸覚えでなく，模倣を繰り返しながら分析を行っており，さらにタイプ頻度が増せば抽象的なスキーマ形成につながっていくと期待できる。しかし，大人数の教室，そして限られた時間的資源の中で，意味ある文脈の中でどのようにタイプ頻度を高めるのか，そして，どのように援助を行っていくのか，という現実的な問題の検討も課題として残っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① Tode, Tomoko, Complexity development in less proficient adult EFL learners: A dynamic systems approach, *Studies in Linguistic Expression*, 査読有, Vol.28, 2012, pp.1-15
② 戸出朋子，タスク配列における学習者主導のフォーカス・オン・フォーム―大学英語初級教室の一事例―，言語表現研究，査読有，第27号，2011，1-13

〔学会発表〕（計　６件）

③ Tode, Tomoko, Usage-based learning in scaffolded production: A case of a task-based EFL learner, the 5th Biennial International Conference on Task-Based Language Teaching, 2013年10月3日～5日発表予定, Banff, Alberta, Canada
④ Tode, Tomoko, From metalinguistic to usage-based: A case of an adult EFL learner in a task-based classroom, 第38 回全国英語教育学会愛知研究大会，2012年8月4日，愛知県，愛知学院大学
⑤ Tode, Tomoko, The task cycle and variability in second language development, The 4th Biennial International Conference on Task-Based Language Teaching, 2011年

11 月 8 日, the University of Auckland, New Zealand

⑥ 戸出朋子, 成人初級者の第 2 言語発達における複雑性変容の過程―ダイナミック系アプローチ, 第 37 回全国英語教育学会山形研究大会, 2011 年 8 月 20 日, 山形県, 山形大学

⑦ 戸出朋子, 介護のためのタスク中心教授開発と初級クラスでの実践, 第 49 回 JACET 全国大会, 2010 年 9 月 8 日, 宮城県, 宮城大学

⑧ 戸出朋子, タスクにおける学習者主導のフォーカス・オン・フォーム―大学英語初級教室の事例から―, 第 36 回全国英語教育学会大阪研究大会, 2010 年 8 月 8 日, 大阪府, 関西大学

６．研究組織

(1)研究代表者

戸出　朋子（TODE TOMOKO）

新潟医療福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：00410259

(2)研究分担者

該当なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

岡田　史　（OKADA FUMI）

新潟医療福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：90410274